

コロナ禍における法文学部の 被災記録の収集と保存V

— 2021年度学生座談会報告書 —

青木理奈・鈴木 静・福井秀樹
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子
池 貞姫・十河宏行・中川未来

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染蔓延の長期化は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曾有の災厄である。愛媛大学も、急速に進む感染拡大に対応して、教育提供体制が激変して3年目を迎えようとしている。

今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになるだろう。なにより、今のコロナ禍において刻一刻と事態が変わっていく中、時系列で保存できるよう、記録はコロナ禍の初期から継続的に収集することが重要であると考えている。

本プロジェクトは、今回の未曾有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。

これまで、愛媛大学法文学部の学生を対象としたアンケート2020年度の実施¹⁾、2021年度の実施²⁾のほか、学生手記を収集・分析³⁾、座談会を開催⁴⁾することによ

1) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ—学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」『愛媛大学法文学部論集』第50号（社会科学編），pp.37-68.2021年2月。

2) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ—2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果—」『愛媛大学法文学部論集』第52号（社会科学編），pp.19-54.2022年2月。

り、コロナ禍初年度からの学生生活を分析し記録として保存してきた。

今回の調査は、2年続いたコロナ禍での大学生活で問題となった点、改善できる点、良かった点などをテーマとする座談会形式で行った。教員も座談会に加わり、学生の積極的な語りを引き出すことにより、コロナ禍における大学生の実態の解明——特に学修状況や生活状況の把握——を試みた。

2. 対象と方法

本調査の対象は、法文学部の学部生であり、調査日時、出席者は以下の通りである。

(1) 座談会および参加者の概要

日 時：2022年2月22日(火) 10：00－12：30

開催形態：オンライン（Zoom ミーティングを使用）

出席学生：10名（男性4名、女性6名）

ID (昨年度 ID)	学年	性別	昼夜間主の別	コース
A	1回生	女性	昼間主	
B	1回生	男性	夜間主	
C	2回生	女性	昼間主	グローバル
D (C)	2回生	女性	昼間主	法政
E (I)	3回生	女性	昼間主	人文
F	3回生	女性	夜間主	法政
G	4回生	男性	昼間主	法政
H	4回生	男性	夜間主	人文
I	4回生	男性	昼間主	グローバル
J (M)	4回生	女性	昼間主	留学生

3) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ－2020年度学生手記の分析－」『愛媛大学法文学部論集』第51号（社会科学編），pp.93-111.2021年9月。

4) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ－2020年度学生座談会報告書－」『愛媛大学法文学部論集』第51号（社会科学編），pp.117-138.2021年9月。

なお、1回生は、所属コース振り分けは行われていない。また、() 内の ID は、昨年度も参加した学生の ID 番号である。

(2) 座談会の共通テーマ

今回の座談会では、「コロナ禍における大学生生活について」を共通テーマにし、以下の3点につき学生に発言を求めた。①1年を通じて大学生生活はどうであったか、②昨年度と比べてどうであったか、③今後、大学へ望むこと、将来に向けて今頑張っていること、コロナ禍が収束したらやりたいことなどである。

(3) 倫理的配慮について

本調査において、対象者には、以下の内容を口頭で伝え、倫理的に配慮した。座談会冒頭において、本調査の趣旨を明確に伝え、論文等で公表すること、録音することを依頼し同意を得ている。本稿での発言は全て匿名とし、公表する発言内容は、事前に学生それぞれに確認している。学生が発言内容について削除を求めた場合には、応じている。

3. オンライン座談会の内容

以下の発言は文脈が変わらない範囲で整えている。なお、冒頭の趣旨説明、教員や学生の自己紹介、重複する発言や感想、最後の教員からの挨拶等は省略している。司会は、法文学部教員が行っている。

— 1年を通じて、大学生生活はどのように感じられたか。

学生 G (男性・4回生・昼間主)：就職活動があったが、公務員志望だったので勉強する時間が長かった。就職活動の不安、勉強の進捗状況、公務員の説明会等、他の人がどの程度情報を得ているのかということが分からず不安があった。友達ともなかなか会えない状況なので、不安を話す機会が少なかった。不安などを話し合う機会がもっと欲しかったなと思うときに、去年より多いと感じた1年間だった（なお、H、I 同意見）。

学生 H (男性・4回生・夜間主)：実家が県外で、帰省し就職活動をしていたので遠隔授業は非常にありがたかった。対面授業だったら受けられなかった授業も多かったの、そういう配慮があったおかげで何とか単位を取れて卒業できるので、大学に非

常に感謝している。

学生 I (男性・4回生・昼間主)：民間企業を中心に就職活動をした。県内でもオンラインでの説明会、面接が結構あったが、オンラインだったおかげで企業まで行かずに行うことができ、幸運だった。授業はほぼゼミしか履修していなかったが、ゼミはオンラインで話し、特に支障はなかった。プライベートな面に関しては、今年はコロナ感染者数に波があったと思う。多かったり、時には0人のときもあったりしたが、0人のときだとその範囲、場所、人数を考慮して遊びに行った。感染者の人数が多いときだと家の中で自分の時間を過ごしたり、メリハリをつけて、それなりに1年楽しむことはできたのかなと思っている。今年1年特に何か困ることなくそれなりに楽しめたと思う。

学生 J (女性・4回生・昼間主・留学生)：4年生で授業はゼミしかなく授業が少ないことで、リモート授業も慣れた（学生 E 同意見）。また資格の試験、大学院入試に関する準備をしたが、その時間は充実していた。

学生 E (女性・3回生・昼間主)：この1年大きく分けて4つのクォーターにわけて生活を振り返る。第1クォーターで運動不足で、ぎっくり腰になり結構大事になったが、授業は遠隔時だったので、家から履修できて助かった。第2クォーターから夏休みぐらいいにかけて、結構コロナの感染者数も増えた時期で、デルタ株で「やばい、やばい」みたいになっていたのですごく不安な時期だった。実家に住んでいることもあり、友達ともどこまで会っていいかわからず、ふさぎ込んでいた時期だった。後期からは、就職活動時期になり、東京や関西方面の企業を受けている。毎回、企業まで面接に行かなくて良かったり、オンラインで参加できたところは非常に手軽になって良かった。反対に、先日対面での面接があり、飛行機で移動したが、松山に帰ってきてPCR 検査を受け、陰性の結果が出るまでホテル泊をした。大変な時期だった。

学生 F (女性・3回生・夜間主)：今年1年、できる限り大人数の場所に行きたくないと思っていたので（実家ということもあり）、授業の形態も対面でない授業を探すためにシラバスを念入りにチェックした。大学の友達との交流は去年に引き続いて少なく、SNS だけの繋がりが多い。コミュニティはアルバイト先ぐらいいだったので就職活動とか情報交換もアルバイト先で全部済ませてしまった。周りがどれぐらいい進んでるかという情報交換の場所があまりなかったと感じて、不安に思っている。

学生 C (女性・2回生・昼間主)：オンライン授業自体の形態には慣れたので、授業に関して負担は特別なかった。私が入学してからコロナの影響でオンラインの授業が2年間続いているので、対面の授業もあまりなく、ゼミぐらいだったので、正直大学に通っている感覚が今でもあまりしない。大学生活を満喫している感じは正直ない。学校の行事であるとか部活動も所属しているが、それも思うように活動もできず、もどかしい。その制限がある中でも、部活動のメンバーとの関わり、アルバイト先での活動、経験での充実感はそのなりにあった。この制限された状況の中でも、自分の周りの人たちがそれぞれ考えて、自発的に行動しているのを見て、自分は何もできてないという焦りを感じている部分もあった（学生 D 同意見）。

学生 D (女性・2回生・昼間主)：法政コース必修科目「社会科学リテラシー」⁵⁾のガイダンスが対面授業だった。後期は10月の頭からは対面授業が2科目あり、12月で対面授業が大幅に増えてからは6科目、全体の半分ほどが対面授業になった。私は対面の方がモチベーションが上がるのと、一人暮らしで大学から家が近いのでさほど大学に行くのが苦じゃないので、対面授業の方がいい。ずっとオンラインだったので、学生らしさは後期になって感じた。夏ぐらいにサークルに入った。しかし、活動もそこまで盛んではなく、交友関係は広がっていない。

学生 A (女性・1回生・昼間主)：今年初めての大学生活だったが、初めての大学生活だったからこそ大学とはこんなものだという印象で特に大学に対して不満や不安はなかったのが、この1年の印象である。大学の修学支援システムなど情報が充実していて、特に情報不足を感じることはなかった。授業に関して言えば、個人的に選択肢を広げるために英語の教員免許を取るための勉強を始めた。そのカリキュラムに沿って履修登録をして、科目数が多くて苦しい1年を過ごしてしまい、視野を広げなかったのかって関心が狭まってしまった、苦しかったという気持ちがある。夏季休業は9月に検定試験があったので、1か月間にわたり勉強した。現在も自分がしたい勉強をしている。長期休暇で比べると2021年の9月の1カ月と今2022年の2月では、今のほうが集中力が非常に低下していると思う。Eさんが運動不足の話をしてしたが、私も運動不足で集中力が低下していると思う。ほかの人と関わらない分自主性を問われて

5) 愛媛大学法文学部法学・政策学コース2回生向けの専門科目。授業の目的は、社会の維持や社会問題解決に必要な社会科学的概念・手法に対する知識と理解力の基礎を身に付け、履修コースでの学習の素地を得ることにある。2021年度の具体的内容は、法学・政策学コースの履修やゼミ選択など全体に関わることだった。法律学、経済学、政治学分野の4人の教員が、具体的テーマに基づき法学・政策学的なアプローチについて講義を行った。

生活していると思う。そのなかで自分の悪いところも見え、苦しんで、自分の嫌なところがどんどん見えてくる1年だった（学生F同意見）。

学生 B（男性・1回生・夜間主）：1回生ということで最初は大学生の友達ができるかなどの不安があり、数少ない対面授業がある中で高校の同級生を介して友達ができたことはすごく良かった。遠隔授業が多かったので自分の時間を作れる機会が多く、空いた時間をすごく有意義に過ごすことができた。大学に対する不満は特になく、充実した生活を送ることが出来た。

一遠隔授業での教材提供の質は、昨年と比べてどうであったか。今年入学した1回生の皆さんは、教材としての動画や資料をどのように感じたか、不満はなかったか。

学生 C：2年目になるので、オンラインの授業、講義自体には慣れて（2回生以上の学生ほとんどが同意見）余裕ができて自分の時間を少しずつ作れるようになった。増えた時間で自分が講義中に気になったことを調べたり、学びを深めることができた。去年受けた Moodle の授業では、先生からの課題を私たちがこなして終わる授業が多かったと思うが、今年は、先生からの投げかけがあり、その後、学生が返したのものにもう一段階返してくださる授業が多かったので、対面の授業に近づいた形式のものが増えた気がする。講義の質など、去年よりたくさん工夫してくださっていると感じた。講義時間については、提供される動画が全部で合わせて1時間だったとしても、15分ごとなど何らかのセクションごとに分けてくれるとよい。後から復習するときも、気になっていたところが後から調べられる。また、テスト勉強をするときにも、やりやすくなる。後期の授業で良かったのは、同窓会科目の「社会と人間」⁶⁾ だった。コロナ禍で人に会うのが難しいなか、社会人から話を聞ける機会が貴重だった。

学生 D：昨年との違いは、専門科目の対面授業が可能になったことが大きく、学生らしいと思った。

学生 F：良かった授業は「民法」。レジュメや動画が分かりやすかった。遠隔授業で非同期型だったので動画配信だった。動画は倍速でも聞ける配慮があり良かった。

6) 愛媛大学法文学部学科共通の専門科目。授業の目的は、法文学部卒業生から学生生活での経験談（就職活動等）を若い先輩方との語り合いを通して、大学生生活や卒業後の社会生活を自ら考え設計する契機を得ることである。2021年度は、13職種の法文学部卒業生が、大学卒業後の実体験をもとに職業生活や生き方について講義を行った（遠隔同期型授業で実施）。

学生 H：良かった授業は「心理学概論」。Moodle 上に動画や参考資料のリンクがあり、即座にクリックしてサイトに飛べる。こういう面は遠隔授業のほうが有利だと感じた。対面授業の際に印刷した用紙が渡されるが、遠隔授業の際にはそれがない。無駄がなくなったのもいい点だと思う。

学生 A：大学生になって授業を受けて感じたのが、ICT とかオンライン教育をしたからといって、現代的な教育になるわけではないと感じた。パソコンを使う時間が増えて、現代的な勉強の仕方をしているような気がする一方で、使っているツールのみが現代的な気がしていた。大学の教室でしているような授業を、無理やり Moodle 上でやっている気がしていた。ある授業では1時間半の動画を見て、動画とは全く別の課題をする授業があった。1時間の授業内容を要約しながら、または教員からの課題に取り組みながら視聴できる授業は苦ではなかった。一方、1時間半の動画をただ見るのは辛かった。動画を倍速設定にして聞くこともできるが、倍速にしていたことが教員に知られ、そのことで評価が悪くなるのか不安だった。そのため倍速にして聞くことはできなかった。

学生 E：昨年は、Moodle を使う授業と修学支援システムで連絡がくる授業等が混在していた。今年は、それが改善されればいいと期待していた。しかし、今年も先生ごとに異なっていた。加えて、修学支援システムから、就活ガイダンスのお知らせや、授業アンケートのお知らせが沢山あり、そのなかに授業の連絡が混じってくる。非常に分かりづらい。私個人としては Moodle の方を連絡手段として一元化してくれた方がよい。授業を受けるべき時間に確認するし、その場で必要な情報が整理されているのでわかりやすい。「朝鮮言語文化特講」は、Moodle のフォーラム機能（受講生が意見や質問を入力すると、登録している全員もその内容を確認することができる）を活用しているが、良いツールだと思う。フォーラムを使って、受講生みんなで話し合うことができ、最後に先生からの総括がある。ほかの授業でも、フォーラムも活用してほしい。

学生 F：昨年は、遠隔授業のうち同期型授業で利用する Zoom の招待メールとかを、授業直前の1日前に送ってくる先生がいた。しかも、その時に受講生は、その授業を同期型でやることを初めて知る感じだった。授業の時間帯に、すでにアルバイトの予定を入れていたこともあり、何回か授業に出席できなかった。授業形態の連絡を直前によこさないよう考慮してほしいと思いアンケートにも書いた。今年度は、そのような直前の連絡がなくなったのが良かった。

学生 G：昨年度は遠隔授業に慣れていかなければいけないことに対してのストレスや不安があった。今年はある程度慣れてきて、慣れてきたと同時に、いつまでこの状態が続くんだとも思った。学生の感想を、次回の授業でその一部を紹介してくれたのがあった。遠隔だと一人で授業を受けている気分になることが多いので、他の人のコメントを紹介してくれると、同じようにほかの人も一緒にこの授業を受けているのだなと分かって良かった。「社会保障法」の授業では、コメント欄に、授業内容について意見を出す機会があった。意見を書いてみると授業内容も理解できるし、教員が学生の意見を授業に反映させてくれたりした。こういうことで、遠隔授業のストレスがだいぶ軽減されたように思う。

学生 J：印象的だった授業は英語に関する授業だ。その先生は自分の声を録音して、スライドにつけて動画にしてくれた。留学生なので一度聞いただけでは理解しにくい内容を、何回も復習できるのが良かった。留学生なので、日本語も上手ではない。日本語の講義が全て理解できるわけではない。質問したくても、対面授業の場合は恥ずかしいし難しい。ある授業で、その先生はいつも最後に質問の時間をくれて、他の人が退出してから質問できるので、とても良かった。

一交友関係や日常生活については、どのような変化があったか。

学生 A：もちろん高校生から大学生という点ではかなり大きく変わったが、私は実家に住んでいるので、家族との関わりや友達、友人関係は大きくは変わらなかった（学生 B 同意見）。

学生 C：少し慣れてきて趣味も増えた。オンライン用のイヤホンを買ったり iPad を買ったり、自分の学習環境が良くなるような周辺機器を揃えた。

学生 E：交友関係は完全に2回生のときより狭くなった。1回生より2回生、2回生より3回生という感じで狭くなった。生活リズムが、これまでとはかなり変わっているし、それも人それぞれに異なる。正直、今年もオンライン授業ばかりだったので、2回生の方が話したように、3回生の私たちも友達はかなり減ったと思っている。

学生 F：昨年に比べて自粛ムードも若干緩まってきた感じがしている。その分、就職活動でもコロナ禍でも学生時代に力を入れたことを聞かれたり、またコロナ禍だからこそもか始めましたか？と、質問されているような気がした。A さんも言ってた

が、コロナ禍で、何もできてない自分が嫌になる。自粛はしなければいけないけど、何か自主的な行動をしなければならぬのではないかな。ほかの人たちは行動を起していて、いつの間にか自分だけが置いていかれているのではないかなという感覚になった。昨年よりも、コミュニティが狭くなり、精神的な面でちょっと不安定になることが増えた。

学生 G：昨年度は生活リズムが大きく崩れてしまった。今年は、同じ環境の中でも、生活リズムが崩れないよう情報収集をし、工夫をした。今年は、コロナで得た知識や経験を今後の人生でどう生かせるかということと比較的よく考える年になった。

学生 H：生活面で言えば、人がいないところで散歩をした。たとえば、松山城とか総合公園とかに一人で行くことが増えた。Eさんも言っていたが、私も運動しなくなってまずいなって思った。

学生 I：昨年と比べて大きな変化は特にはないが、コロナ禍前に比べると、大学が勉強するだけの場所になってしまった。授業で友達と会って少し話したり、授業が終わってから「次授業あるの?」とか「学食行こう」という何気ない会話がなくなってしまった。前向きに捉えると、友達と気軽に会えたり、話したりが当たり前じゃない、大切にしようと思うようになった。就職活動でコロナ禍でも「何をしましたか」など聞かれるのも、コロナ禍に入ってからの変化だと思う。今年に入って、愛媛大学でも感染者が増え、友達もコロナになったりし、身近に感じる機会が多かった。コロナ禍に入って遠隔で授業をしたことも、そうしたことを友達と話したりしたことも、仕事に就く前に経験できたことも、前向きに言えば良かったと思う。

—今後、大学へ望むことはどのようなことか。

学生 C：授業を遠隔でするか対面でするかの連絡は、できるだけ前もって教えてほしい。以前、3限の授業なのにお昼過ぎに今日は対面と連絡があり、実家から1時間ぐらい自転車にかかるので、大変だった。

学生 B：正直なことを言うと自分がやりたいタイミングでできる非同期型授業が私にはあった。今後とも、出来ることならば非同期型授業を中心にして欲しい。

学生 D：私は対面授業の方が好きなタイプ。大学は、コロナが流行りだしたら遠隔に

切り替えるのは早いですが、反対に感染者数が収まっているときに、対面授業に切り替えるのは遅いと思う。対面授業ができる時期に早めに対面授業に戻してほしい。遠隔の授業のなかには、その授業時間までに Moodle に教材をアップロードしてくれない先生がいる。学生からは言いにくいので、先生は授業時間までにアップロードすることを厳守してほしい。対面でも遠隔でも、授業の最初に、その前の回に出た学生の質問、感想を取り上げて、先生がコメントを言うてくださるのはよかった。他の人の意見を知ることができるのは貴重で、今後も続けてほしい。

学生 G：この3月で卒業する。後輩のために大学に求めることは、こうした座談会で出た学生の意見を授業に生かしてもらいたい。

学生 H：私は夜間主コースだが、昼の時間バイトができなくなったので昼の時間に授業を入れることが多くなった。その結果、本来必要な夜間の単位が足りず、このままでは卒業できないと言われた。単位不足等は、学期初めに毎回メールで教えてもらえたら有難い（学生 I 同意見）。

学生 I：キッチンカーを大学に呼んでいたことをニュースで見ても、素敵だなと思った。コロナの影響で学食が閉まっている期間は、一人暮らしの人は助かると思うし、ニュースで取り上げられたら愛媛大学自体が良いアピールになると思った。この座談会も他コース、他学年と交流できるのはすごく素敵だと思う。

学生 J：充実した学生生活を送れるように経済的な支援だけではなく、生活的な支援も充実してほしい。大学で友達が作れる機会が増えるような遠隔交流会などが増えるといい。

学生 E：来年以降、大学側に考えてほしいことがある。それはインターンシップに関わること。一つ目は、事前指導の連絡時期を工夫してほしい。事前指導を履修することが必須だが、その連絡が遅すぎる。結果的に事前指導を受けることができたのだが、また、事前指導の内容は適切なものとは思えなかった。スーツはこういう風に着ましようとか、ハガキはこう書ましようとか。私は就職活動を早めに始めているが、コロナで就職活動の方法も激変しているため、ハガキなんて1回も書いたことがない。そういうギャップがあった（学生 F 同意見）。また、事前指導とインターンシップの関係の指示もわかりにくかった。事前指導を受けないと、企業のインターンシップが受けられないことがあるとの説明があったが、それが私の希望している企業

なのかどうかはわからず、不安になった。詳細な説明が欲しかった。もう一つが、大学から配布される「キャリア形成ハンドブック」について。入学時に配布されるが、私は就職活動を始める3回生になってから読んだ。とてもためになる内容だと思う。入学時でなく、就職活動を始める3回生で配布するのしたら良いと思う。他にも就職支援について要望がある。就職面接もオンラインが増えている。オンライン面接の際には、顔が明るく映るライトを用意することが重要になってきている。こうした新たな状況に対応する情報をえる機会が、大学にはない。そのために、学生間で情報格差がでてきていると思う（学生F 同意見）。

学生 F：この座談会に初めて参加した。普段のコミュニケーションが少なくなっているので、久しぶりに様々な人と話した。こうしてオンラインで、マスクなしで、互いの顔を見て話すことで、「自分には意外とこんな良いところがあったんや」と気づける機会になったのがよかった。今後、他人と接することが乏しい1~2回生には、様々な人と交流できる機会を増やしてほしい。自分自身を肯定的に捉える機会になるし、自分の意見を話すことは恥ずかしいことじゃないと気づく。そうした機会を設けてあげてほしい。インターンシップに関しては、事前指導の有無ややり方に振り回されてしまったが、大事なのはインターンシップが始まってからだと思う。インターンシップの事後指導も受けたが、事後指導をする意味あるのかなという内容で不満だった。事前指導、事後指導を受けることは単位修得のために不可欠なのだから、そのあり方を見直してほしい（学生E 同意見）。

一将来に向けて頑張っていること、コロナが収束したらやりたいことはどのようなことか。

学生 A：今年1年の反省点である視野を狭めすぎたことを転換しようと思って、いろいろなことに目を向けるようにしている。人権問題を前から勉強しているが、今後は国際的なものに目を向けたいと思って、コロナが収束したら、世界的な遺産巡り、難民キャンプ、今問題を抱えている場所に行きたいと思っており、そのために外国語の勉強をしている。ほかには、収束したら広い世代の人と交流を持ち、人脈を広げたい。

学生 B：趣味の一つとしてサッカー観戦があって、今は、県外は行きづらくて、家から中継を見ることしかできていない。コロナ禍が収束したら、県外の現地に行って観戦したい。

学生 C：将来に向かって頑張っていることは、英語、中国語、手話等、言語の勉強。勉強を続けて自分の選択肢、可能性を広げたい。コロナが収束したら、語学力を生かして、海外に行きたい。

学生 D：3月に TOEIC を受けようと思っているので、その勉強をしている。ほかには、コロナ禍で家で過ごす時間が増え、K-POP にハマったので、韓国語の勉強をしている。最近是世界遺産の本を図書館で借りたりしているので、収束したら海外旅行に行きたい。

学生 G：3回生の夏にイタリアとスペインに行く予定で貯金をしていたがコロナ禍になって行けなかったので、海外旅行をしたいと思っている。就職したらなかなかヨーロッパの方は行く時間がとりづらいと思うが。

学生 H：コロナが落ち着いたら、また四国旅行に行きたい。

学生 I：コロナ禍に入ってから、愛媛県内で遊ぶことが増えた。私は愛媛出身だが、より愛媛の良さを知ることができた。コロナ禍が収束してやりたいことは、シンプルに友達とコロナを気にせず遊べたらいい。マスクせず、人混みに行っても全然気にしないような生活が送れたらいい。ほかの人が言うように、海外旅行にも行きたい。

4. おわりに

本研究では、生の声がきける座談会を開催することで、コロナ禍における大学生の実態を明らかにし、学修状況や生活状況を把握した。

遠隔授業開始から2年が経過し、オンライン授業自体には慣れたものの学年よっての違いも見えてきた。

1回生はコロナ禍での大学生生活だと割り切っていたためか不満、不安は比較的少ないように感じられる。しかし、自分の時間を上手に使うことに苦労し、集中力の低下や自分のできていないところが目が行ってしまい、結果、自己肯定感の低下を感じることもあったとする発言が複数見られた。ただ、大学生活をスタートするにあたり情報不足を感じることはさほどなかったとの発言からは、この間の大学の対応に一定の改善がみられたことの証左とも言えるのではないだろうか。

2回生は、遠隔には慣れたものの大学に通っているという感覚は今でもなく、サークル等の活動も思うように出来ずもどかしいという思いや、制限がある中でもうまく

活動している周りとは比べてしまい、焦りを感じている部分もあったことがうかがわれる。入学時からコロナ禍だった学年であり、コロナ禍の影響を一番受けている。今後とも心理面も含めた支援が必要だと考えられる。

さらに、3、4回生は、インターンシップや就活に力を入れた一年を過ごしており、大学生活自体には大きな不安を感じず、遠隔授業のメリットを活用し、自分の生活とのバランスを考えていたことがうかがわれる。就活に関して友達と情報交換できなかった不安は共通してあるものの、どこまで対面を重視しているかによって、個人差がでている。また、座談会中に生活に「メリハリをつけて過ごした」と発言していた学生がいたが、状況の変化に応じて工夫して過ごした学生は、不安や不便さをそれほど感じない傾向にあるのかもしれない。さらに就職活動や大学院進学等に力を注ぐことで、大学生活を充実させていると感じているようにも思われる。

遠隔授業の質に関しては、2~4回生すべてにおいて、2020年度と比べ肯定的な意見が多く、具体的に良かった授業やその内容なども述べられた（後掲の速報版）。とりわけ、学生からの質問に対する教員のレスポンスに関しては、学生が授業に主体的に取り組む姿勢を強化する効果を生み出している。

また、遠隔非同期（オンデマンド）型授業で提供された講義動画について、「倍速でも聞ける配慮があり良かった。」という意見と、「倍速にしていたことが教員に知られ、そのことで評価が悪くなるのか不安だった。そのため倍速にして聞くことはできなかった。」という意見が見られた。これらは、講義動画に限らず普段から動画の「倍速視聴」を日常的に行っている世代の実感と実態を反映した意見と思われる。講義動画の再生スピードを上げて視聴する受講スタイルが直ちに「遠隔授業の質」の低下を招くとまでは言い難いものの、複数の講義動画の同時視聴が問題となった他大学の例もあることから、今後は講義動画の視聴方法を含めた受講ルールを教員の側で予め明確な形で学生に提示しておくことも課題の一つと言えよう。

今回、昨年度に引き続きオンライン座談会を開催したが、学生たちはオンライン上での発言や意見交換について、慣れとともにスキルアップをしているように思われる。昨年度の座談会では、画面をオフにして顔を映し出さないことを希望する学生も多かった。そのため、発言が遠慮がちになると同時に、共通したテーマを話し合っているにもかかわらず、それぞれの発言が噛み合わないと感じられるところもあった。しかし今年度に至っては、参加者全員が画面をオンにして顔を映し出すことにためらいがなく、それぞれ積極的な意見や経験が語られ、他の参加学生の意見に対して、賛同の意を示す場面や、同様の自身の経験を語るといった様子が数多く見られた。最後の感想でも、ほぼ全員から、座談会の参加に対して肯定的な意見が寄せられ、他学年他コースのことを知ることで嬉しや、話すことでモヤモヤが解消されたり、参

加してみると、意外と話したいことがあると気づく機会になったり、経験を語り合い、共感しあうことで、支え合っていると感じた時間になったようだ。

昨年度に引き続き共通している点は、運動不足により体調を崩した学生がいたことであり、家に居続ける状況が心身両面にもたらす影響を改めて確認することができた。全国的にコロナ禍が長期化している中で、愛媛大学は、2022年4月より原則的に対面授業に切り替え、さらに、6月23日からは大学のBCPレベルもほとんどが最低レベルの「ライトイエロー」になっており、With コロナの段階に入ったとして、教育提供体制の切り替えを行っている。このように感染状況の程度や長期化に伴って、大学の教育環境は今後も大きく変化し続ける可能性がある。こうした教育環境の変化が学生にもたらす影響には、予測できない部分が多い。例えば、2022年度前学期（とりわけ4月）には、対面授業の増加に起因する疲労を訴える学生も少なくなかった。教育提供体制の変化が、学生にどのような影響を与えるのか、引き続き注視し、学生側の物理的・心理的負担の軽減を図る必要もあるだろう。今後、他学部や他大学との比較をしつつ、学生の心理的な変化に注目して、引き続き調査をしていきたい。

謝辞

今回、この座談会に携わって頂きました法文学部の教員、ならびに参加してくださいました法文学部学生の方々に感謝の意を表します。

また、この研究は、令和3年度法文学部戦略経費、令和3年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革GP）及びJSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。

【資料】速報版（2022年3月14日、法文学部教職員へ送信）

コロナ禍における法文学部学生による座談会記録の一部 －2022年度の授業設計や授業内容の参考のために－

令和3年 GP 愛大教育改革 GP 法文学部プロジェクト

代表 福井 秀樹

実施担当者 青木 理奈 石坂 晋哉 太田 響子 小佐井良太
鈴木 静 十河 宏行 池 貞姫 中川 未来

令和3年愛大教育改革 GP 法文学部プロジェクト「コロナ禍における法文学部学生の『被災』記録の収集、保存」では、2022年2月22日(火) 10時から12時にかけて、法文学部生10人に集ってもらい、オンライン座談会を開催しました。学年や性別、コース、昼夜間主に大きな偏りがないように留意して、参加学生を募りました（とりまとめは鈴木、青木、司会は小佐井）。座談会の場で、学生から出た発言の一部について、ご紹介します。コロナ禍が長期化するなかで、2022年度の授業設計の参考情報としてお知らせすることが趣旨です。ここで出た学生の意見、発言がすべてではなく、また先生方からも異なるご意見もあろうかと思えます。しかしコロナ禍で、なかなか学生と直接話す機会が十分に取れないなかで、座談会で得られた学生の貴重な意見をご覧いただく価値はあると考えました。

お手すきのおりにご一読いただけましたら、GP プロジェクト一同の励みとなります。

1 この1年間の大学生生活はどうだったか

遠隔授業開始から2年たち、「オンライン授業にも慣れた」と発言する学生が多かった。また、「周りの人たちが、（コロナ禍の）制限された状況でも自発的に行動しているのを見て、焦りを感じる」の発言も複数あったのが特徴的である。

後期から就職活動を始めている3回生からは、「後期は、就職活動を始めた。東京、関西など（感染状況が深刻な地域）の企業を志望。オンラインで面接等できることはよかった」一方、首都圏で行われる対面面接もあり、その際には松山についてからPCR検査を受け陰性を確認するまでは、移動できなかった経験も話された。また、「就職活動で、コロナ禍で何をしてきたかを聞かれると、何もできていない自分が嫌になった。自粛を守っていたら、いつの間にか置いて行かれるような気になった」と不安な気持ちをかかえている発言もあった。

入学時点から遠隔授業が主だった2回生からは、「後期は対面授業が2科目あり、12月で対面授業が増えてからは、半分くらいは対面授業になった」ことを喜ぶ発言も見られた。1回生からは、「数少ない対面授業で、高校の同級生を介して友達ができた」との発言があった。

また、ほとんどの学生から、友達に会える機会が少なくストレスを感じた発言があり、なかには「大学が本当に勉強するだけの場所になってしまった」（4回生）の発言も見られた。

2 遠隔授業の進め方や教材提供の仕方はどうだったか。

(1) 昨年度に比べて良かったこと

2回生以上のほとんどの学生から、「遠隔授業の質は、去年と比べて上がっていると思う」と肯定的な意見があった。

1) 授業の進め方や教材提供の仕方

- 良かった授業は「民法」。レジュメや動画がわかりやすい。倍速でも聞ける配慮もあった（3回生）。
- 良かった授業は「心理学概論」。動画や参考資料のリンクがあり、即座にクリックしてそのサイトに飛べる（4回生）。
- 「朝鮮言語文化特講」は、Moodleの「フォーラム」機能を使っている。ほかの学生の意見を見られるので、皆で話し合う雰囲気があって、良いツールだと思っている（3回生）。
- 良かった授業は「社会と人間」。コロナ禍で人に会うのが難しいなか、社会人から話を聞ける機会が貴重だった（2回生）。
- 良かった授業は「社会保障法」。授業の進め方について学生の意見を聞いてくれ、授業に反映させてくれた（4回生）。
- 良かった授業は「英語」。教員がスライドに自分の声で録音して流してくれるので、繰り返し視聴できるのが良い（4回生）。
- 同期型は、退室せず残っていたら質問できるのが良い。対面授業の時に、質問は恥ずかしい（4回生）。

2) 動画教材の長さや工夫

- 適切な動画の長さについて、同じ1時間半でも、先生が内容を要約しながら課題を進めるのはやりやすかった（1回生）。
- 講義の動画時間の長さについても、工夫をしている先生がいる。全部で合

わせて1時間が1時間だったとしてもその15分ごととか、何かセクションごとに分けている。復習するときも、わかりやすい。テスト勉強の際にも、勉強しやすい（2回生）。

3) 教員からのレスポンス

- 課題で授業内容の感想を書いたり質問を提出したりすると、次の回に先生から、感想に対するレスポンスがあったり、動画や必要な資料を追加して送ったりしてくれるのがよかった（4回生）。
- 学生の感想を、次回の授業でその一部を紹介してくれたのがあった。普段、自宅で1人だけで授業を受けているので、他の人のコメントを紹介してくれていると、同じようにほかの人も一緒にこの授業を受けているのだなとわかってよかった（4回生）。
- 対面でも遠隔でも、学生の感想等を取り上げて、先生がコメントを言ってくださるのがいい。他の人の考えを知ることができるので、今後も続けて欲しい（2回生）。

(2) 次年度以降に改善してほしいこと

- 1時間半の動画を視聴した後、別な内容についてレポートを書いた。提出する授業は、動画教材と課題がリンクしておらず戸惑った、負担に感じた（1回生）。
- Moodleで連絡が来る授業と、修学支援システムで連絡がくる授業が混在していた。今年はその点が改善されることを期待したが、今年もバラバラでわかりにくい（3回生）。
- 同期型や対面授業になるかどうか直前まで連絡がこないのは困る。直前の連絡で対面や同期型であると知るものもあった（3回生）。
- 事前指導を受けないとインターンシップに参加できないと連絡が来るが、詳細が分からない（3回生）。
- インターンシップの事前指導と事後指導のあり方を見直してほしい（3回生、複数）。
- 遠隔授業の時に、授業時間までに教材が上がっていないときが困る。1週間ほど遅れたことがあり、学生からはそのことを伝えるのが難しい。先生は期限を守ってほしい（2回生）。

3 大学に望むこと、要望など

- 大学は遠隔に切り替えるのは早いですが、対面に切り替えるのは遅い。もう少し早くならないか (2回生)。
- 入学時、キャリア形成ハンドブックが配られたが、もう少し後の方が良い。内容が良いので、就活等が現実味を帯びた学年の方が役に立つ。就職支援も、オンラインの面接が増えているので、そういう情報や支援をしてほしい。オンライン面接用に、顔を照らすライトを使っているが、就職支援課はそういう情報を教えてくれるといい (3回生)。
- 学期のはじめに、履修状況や要卒単位についてメール等で指示があるとよい。担当教員から言われるが、やはりわかりにくい。修学支援システムや Moodle を活用できないか (4回生)。
※なお、教育支援課法文学部チームによれば、卒業要件確認票は学期ごとに修学支援システムから送られています。学生が見落としている可能性があります。今後、必要に応じて、先生方は学生にその旨をお伝えください (GP による追記)。
- 大学は経済的な支援だけでなく、生活上の支援も充実させてほしい。ここでいう生活上の支援は、友達を作ることができる機会を増やすような機会を増やしてほしいという意味 (4回生)。